
こうして魔王の婚約者！？

天音由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こうして魔王の婚約者！？

【Nコード】

N3719Z

【作者名】

天音由羽

【あらすじ】

大好きな家族と、大好きな友だちと、平凡だけれど平和な世界で生きていたエレナは3ヶ月前から不思議な銀狼と出会っていた。そして突然訪れる大好きな世界との別れと、新たな世界との出会い。すべては魔王と言うにはあまりにも紳士な魔王・ラルドの一目惚れから始まっていたという。

「あなたが心から私を求めてくれるまで待っています」そう告げるラルドにドキドキしながらも、ゆっくり紡がれていく二人の物語…。

美しい幻想郷が広がる魔界を舞台に、おとぎ話の王子様とお姫様のような初々しい二人のラブストーリー。

ついに始めることのできたオリジナル小説第1弾！ラルドとエレナのハッピーエンドまで、どうぞお付き合いいただけると嬉しいです。

Vol. 1 失われた世界、そして

こうして魔王の婚約者!?

Vol. 1 失われた世界、そして

ふさふさと手触りのよさそうな銀糸に輝く毛皮。

月の色をそのまま宿したような静かな瞳。

全てのものを噛み砕き、切り裂くような鋭い牙。

視線の先にいるのは可憐な一人の女性。

毎日この時間になると必ずこの公園へやってきて、彼を可愛がってくれるのだ。

他の人間たちは怖がって近づく事さえできないというのに。
ほら、今日も。

彼の待ち人は笑顔で駆け寄ってくるのだ。

「あ、今日もいた。こんにちは、ハスキー」

「ウオン！」

ひょいと彼を抱き上げて、優しく優しくなでている。

ちなみに「ハスキー」というのはつまり、犬の「ハスキー犬」に由来している。

確かに外見だけならそう見えるだろう。

本当は狼なのだが、彼女の満面の笑みにすっかり骨抜きになっている彼は、自分が狼であることをむやみに主張することもない。

これ以上ないほど幸せそうな笑顔で抱き上げられている。

そのうち本名まで「ハスキー」に改名してしまうんじゃないかと心配になる。

彼女との逢瀬（だと彼は言う）はかれこれ三ヶ月以上続いている。そろそろ潮時ではないかと思うのだけれど、初めての恋を知った彼はそれはもう驚くほど慎重になりすぎていて、ああして抱き上げられることに甘んじているのだ。

しかし刻一刻と時は迫っている。

狼の姿はあくまでも仮の姿。

彼はあれでも僕のかつとした主人で、そして魔界の…王。

早く伴侶を見つけて魔界へ連れ帰らないと大変なことになる。

危険はすぐそばまで迫っているのだ。

恐れ多くも最強の魔王に手を出そうと考える馬鹿者はいないとしても、伴侶に対しては違う。

魔王の力を不動のものにする存在を野放しにするほど、魔族ものん気ではない。

まして婚姻を済ませる前ならなおさら、今のうちに伴侶を消してしまおうとするのは当然だ。

それをあの人は、我が主は、解っているのだろうか。

と、彼の方へ視線を向けた時だった。

二人はまさに彼女の帰宅時間が迫って別れを惜んでいる所。その頭上に一筋の稲妻が走る。

急激に北の空が赤く燃え上がって大小様々な火の雨が降り注ぐ。
雲の隙間から見えるのは、赤黒い怨念を映したような空。
聞こえ始める矢を射るような音。

「陛下！！」

「危ない！！」

「きゃあっ！！」

とつさに僕が飛び出すのと、彼が変身を解いて彼女を抱きしめて庇うのと、予想もしていなかったあまりに残酷な光景に彼女が悲鳴を上げるのと、全てが同時で、全てがスローモーションで、全てが一瞬のうちに光となって消失した。

地面を揺るがす大きな衝突音と少しの距離感。

真空状態の地面は根こそぎ爆発に吸い込まれ、再び大きな衝撃が全てを爆風と共に撒き散らす。

鈍い音が遠くから聞こえた。

透明のシエルター越しに赤黒く燃え上がる世界が広がっているのが見える。

呆然と立ち尽くす彼女は結界に手をつきながら地獄絵図と化した光景を見つめていた。

「陛下、これは一体」

「こんなに早く狙われるとは。今まで彼女の存在は隠してきたのに」

「な…それじゃあ彼女を狙ってこの世界を破壊しよう！？」

「恐らく。とにかく彼女をここから連れ出さなければ」

「はい」

陛下はそう言うと静かに彼女の隣へ並ぶ。

「エレナ」

「…あなたは…」

振り向いた彼女の頬にはとめどなく流れる涙。

その瞳はもう何も映したくないと告げるかのように暗んでいた。

「エレナ、お願いです、今は私の言葉を信じてください。あなたを安全な場所へ連れて行きます。もちろんこの世界も元に戻しましょう」

「元には？そんなこと出来るの？」

「私の力があれば可能です。しかし、限界がある」

「限界？」

「あなたの記憶を元にこの世界に戻します。それはあなたが見てきた世界。だから…元に戻ってもそこにあなたは存在できない」

「…！？」

苦々しく告げた陛下の言葉に、彼女の瞳が見開かれる。

こんな風に傷つけることなど望んでいないけれど、陛下は何かを振り切るように彼女の肩をつかんで瞳を見つめる。

彼女の頭の中は混乱しているだろう。

あまりの出来事で麻痺してしまっているかもしれない。

言葉を失ったまま二人を沈黙が包み込む。

そして異様に長く感じられた静寂の後、彼女はそっと顔を上げた。

「誰の記憶から私が消えてしまうの？」

「はい」

「それでも全て元に戻る？家族も友達も、町の人たちも…何もかも、元に戻るの？」

「必ず」

「そして私はこの世界にはいられない、って事？」

「…はい。ですが必ず約束します。あなたを護る。そして生活に関わる全てを保障します。私の命に代えても」

「私の大切な人たちは助かるのね？必ずこの世界は元に戻るのね？」

「はい」

「…お願いします、戻してください。この世界を。そして大切な人たちを…助けてください…！！」

「分かりました」

真剣な瞳で見つめる陛下に、彼女は凜とした姿で願いを託す。

そして。

世界は再び真っ白な光に包まれた。

目を開けていられないほどの眩しさで全てが覆われて、次に目を開けた時には鮮やかな緑の大地と見慣れた町並みにぎやかなざわめきと、そして穏やかな日常がそこにあって。

僕たちは遠く離れた空からそれを見下ろしていた。

結界で作られた球体の中。

眼下に広がる町並みを見下ろして、彼女は座り込むと手を伸ばさうとして結界に阻まれる。

まるでさっきまで見ていた炎の海が嘘だったかのように、全てが何事もなくそこに存在している。

「元に、戻ってる…」

眩いた瞳から、ポツリ、雫が零れる。

「ありがとう、本当に戻してくれて」

「エレナ…」

「まだあなたたちの名前、聞いてなかった。教えてもらえますか？」
健気にも涙で目を赤く腫らしながら微笑んで尋ねてくれる。

陛下は抱きしめたくなるのを必死に堪えるように拳を握り締め、彼女の横に並んで視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「私はラルド。魔界の王です」

「魔界の、王…？」

「そしてこちらは私の側近、ダージリン。今から向かうのは私たちの世界。魔界です」

「嘘…魔界なんて、そんなの、ファンタジーでしか読んだことないわ」

「無理ありません。魔界は本来隠されてきた世界ですから。でもこれは夢でも御伽噺でもないんです。全て本当のことです」

「じゃあ、その魔界の王様がどうして私を助けてくれたの？」

「それはあなたが私の捜し求めていた伴侶だから」

「伴侶？」

「はい。詳しい話は城へ帰ってからにしましょう。このまま留まるのは危険です」

「…ええ」

戸惑いを隠せないまま、彼女は小さくうなずいた。

続く

転移魔法を使って真つ先に辿り着いた城では、すでに魔王の伴侶を狙った人間界への攻撃が知れ渡り騒然としていた。

数年間放浪の旅に出ているとばかり思われた魔王が人間界へ伴侶を探しに行っていた事も驚きだが、そこへ伴侶を消そうと企む魔族たちが攻撃を仕掛けるなど、ここ数百年間で起こった事のない事態だったのだ。

ラルドは最も安全と思われる自分の部屋に転移する。

驚きすぎて声も出せず、大人しく彼に横抱きにされていたエレナをふわりと降ろした。

ざわめく音の方へ視線を向けるが、ほんの一瞬でエレナに向き直って両肩をつかむ。

一休みして団欒、とはいかないようだ。

「ひとまずここにいてください。それからこれを」

「えっ？」

手早くエレナの首にマラカイトの首飾りをつけて小さな声で何か呟くと、それを一際大きな石にこめた。

魔王だけが繰れる祈りの言葉。

聞き取る事のできない不思議な囁きが耳の奥をくすぐる。

心の中に深く染み込んでいくような気がして、目の前で次の動作を起こしていたラルドをぼうつと眺めてしまう。

「魔界でも先ほどの一件は大騒動になっているようですね。私はこれから大臣たちと事態の収拾に奔走しなければなりません。ですからこの石をずっと身に付けていてください。必ずあなたを危険から護ってくれるはずです。それから急場しのぎではありますがが守護魔法を施しておきました。ここにダージリンも残ります。安心してください」

「はい。あの、でも」

すぐさま不安そうな表情でラルドを見つめると、エレナはそつと彼を呼び止めたが、その心配を悟ったラルドはにこりと笑みを浮かべた。

「大丈夫ですよ。魔王の城を襲うような愚かな魔族はいませんから」そう告げて颯爽と身を翻すと、一瞬のうちに彼の姿は消えていた。エレナは黙って彼が消えた場所を見つめ続ける。

めまぐるしく変化する現実には頭は追いつかず、そして魔王と呼ぶにはあまりにも紳士的で柔和な雰囲気纏う彼を、今はただ心配するだけだった。

忽然と彼が消えた部屋は広すぎて、訪れた静寂が寒気に変わる。気付けば空っぽの自分がいた。

今まで感じた事のない喪失感と悲しみの波、そして突然突きつけられた想像もしない現実と、この世界。

感情がごちゃ混ぜだ。

色々な事が一度に起こったせいで全てが現実味を帯びてこない。

小さくため息をついて肩を落としても、ぽっかり開いた穴はふさがらない。

エレナの一つ一つの仕草をダージリンは心配そうに見守っていた。異世界から連れて来られた小さな背中が不安そうだ。

「エレナ様」

「！」

「ここは魔界で最も安全な場所です。安心してゆっくりお休みください」

「ダージリンさん…ありがとうございます」
力を入らない表情で小さくお辞儀する。

いまやこの世界で魔王に次ぐ地位にいる人物にそんな事をされて、ダージリンは

「あっ、エレナ様！？どうか顔をお上げください」
と慌ててしまう。

しかしお辞儀する事も丁寧にお礼を言う事も普通の事だと思っている彼女は曖昧に薄い微笑を浮かべるだけ。

けれどその微笑もすぐに消えてしまう。

垣間見えた普段の彼女の様子も、すぐに空になった心の中に吸い込まれてしまうようだ。

ダージリンはベッドサイドに座るエレナの斜め前にそつと跪き、うつろな横顔を見上げた。

「突然の事で悲しむ間も、そしてお別れする時間も差し上げられませんでしたね」

「…え…？」

何も映していないかのように思えたエレナの瞳が、不意にはつきりとダージリンの姿を映し出す。

どうやら意識は戸惑い、彷徨っているだけらしい。

もちろん深すぎる悲しみが心を覆っている事は確かだけれど。

黒く沈む宝玉のような瞳はまだ空洞だ。

「あなたの世界は戻りました。でもあなたが全て失ってしまった事に変わりはない。本当に申し訳ないことをしました。陛下に代わってお詫び申し上げます」

そこに精一杯の誠意と謝罪の意を込めて頭を垂れる。

エレナはただ驚いたように目を見開き、すぐに複雑な思いを浮かべて目を細めた。

「あなたが謝る必要はありません。それに彼が謝る必要も」

「？」

「私の大切な世界を守ってくれたから。元に戻してくれたから。だから、感謝しこそすれ、お二人を責めるつもりはありません」

そう告げるエレナの瞳はどこまでも優しい。

例え言いようなない悲しみが穏やかに揺れる湖面のように彼女を支配していても、本質的なものはしっかりそこに存在している。

コントロールできそうにない感情に覆われても決して消えてしまふ事のない芯の強さを感じる。

これだから、陛下はあつさり心を奪われたのだと、今なら理解できる。

ただ優しいだけじゃない。

ただ愛らしいだけじゃない。

決して折れない強さがあるからこそ、彼はエレナに心酔しているのだ。

ダージリンはしばらくの間様子を見守る。

そのうちエレナは少しだけ困ったように苦笑を浮かべた。

「今は何がなんだか分からなくて、頭の中も心の中も整理できていないんです。現実を見ないといけない事も分かっているんだけど…正直何をどう受け止めればいいのか…」

「簡単に受け止められる事ではありませんから…今は感じるままです。よろしいのでは？」

「感じるまま？」

「はい。とても一人でどうにかできる状況ではないでしょう？ですから、泣きたいくらい悲しいなら思い切り泣けばいい、訳の分からない状態に戸惑っているなら納得できるまで疑問をぶつければいい。あなたが一人で立ち上げられるまで、陛下も私も、いくらでも付き合います。時間なら有り余るほどあるんです」

そういつて彼が浮かべた微笑は、緊張して張り詰めていたエレナの心を解すのに充分すぎる温かさに満ちていた。

竦められていたエレナの両肩から僅かに力が抜けていく。

「ありがとうございます、ダージリンさん。少しだけ楽になった気がします」

「私のことはどうかダージリンとお呼び下さい。陛下が戻られるまでこの世界や魔族のこと、そして陛下の事…あらゆることについてお話します。その前にお茶をご用意しましょうね」

言いながら立ち上がるダージリンに、ようやくエレナの柔和な笑顔が浮かぶ。

夢にも思わない災難に見舞われ、残酷な現実を叩き付けられ、戸惑いも悲しみもぐるぐる渦巻く感情も何もかもが苦しくて今にも叫

び出したい思いと、反対に何かがつっぱりと抜け落ちてしまったような虚無感を抱くけれど、この場所は温かい。

ラルドにしてもダージリンにしても、心からエレナを心配し、大切にしてくれているのがよく分かる。

自分ではどうにもできないのなら、今は少しだけこの場所に甘えてみよう。

この世界の事を一つずつ知っていった、自分にできる事を探してみよう。

立ち止まっていても何も始まらないから。

エレナはそう決意すると、遠く喧騒が聞こえる街並みを見ようと窓際に歩み寄った。

イギリスの田園風景のようなレンガ造りの街並みが遠くに見える。眼下にはこの城の庭が広がっていた。

垣根は丁寧に刈られて整えられ、見下ろすとまるで迷路のように造りこまれている。

その庭を過ぎて前庭の中央に据えられた大きな噴水の辺りまで行くと、いくつかの人影が見えた。

見るからに高価そうで重そうな服やマントを身に纏った、恐らく「大臣」と呼ばれていた人たちだろう、彼らと一緒にいるのは紛れもなくエレナをこの世界へ連れて来た魔王、その人だ。

小気味良く陶器の揺れる音をさせながら、お茶の用意をワゴンに乗せたダージリンは窓際に佇む彼女を見つけて小さく微笑む。

金で縁取られたカップに琥珀色の紅茶を注ぎながら

「如何いたしましたか？」

と問いかけると、エレナは長い髪を揺らしながら振り返って、考えるような仕草を見せた。

一番の疑問だった。

なぜ魔王であるラルドは自分を助けたのだらう。

彼は捜し求めていた伴侶だといったけれど、いつ私を見つけたの

だろう。

どうしてあの場にいたのだろう。

「あの、ラルド様はどうして…」

問いかけた時だった。

「それは私からきちんとお話しましょう。エレナ」

何故か耳に馴染んでいるラルドの声がして、先ほどまで誰もいなかったはずの扉の前に彼の姿があった。

ダージリンはそつと二人分のお茶を用意して部屋を出る。

残された二人は一瞬引き寄せられるように視線を合わせ、それから間にある距離を手の届く場所までラルドが縮める。

エレナは自然と彼の顔を見上げた。

綺麗な流線で作られた端正な顔立ちに人を魅了してやまないエメラルドに輝く瞳。

唇は穏やかにカーブを描いて、バラの花びらのようにしつとりと艶やかだ。

あまり見つめていたらそれこそ心の奥の方まで奪われてしまいそうなほど、果てしなく美しい人。

以前何かの本で読んだことがある。

魔王は最も強い力を持っているせいで、その容姿も声も何もかも美しく人間を惹きつける、と。

そうして人を惑わすのだと。
けれど。

エレナは無垢な瞳で彼を見つめた。

目の前にいる人物は確かに抜群に美しくて、目を逸らす事も許されないほど惹きつけられてしまう。

それでも彼から伝わるのはエレナを惑わそうとする魔力などではなく、純粹な好意と誠意だけ。

「この世界の事、あなたの事、それから魔族のこと…教えていただけますか…？」

Vol.3 おとぎばなしのようなせかいで

琥珀色の水面が緩やかな波を作って揺れる。

流れを目で追いかけて、近くに感じた温かい気配に顔を上げた。

「まずは私のことから話しましょうか」

「はい」

ティーカップを持つ指は長く細く、流して耳に挟んだ前髪が一束だけぱさりと外れて垂れ下がる。

まるで映画のワンシーンを見ているようだ。

こんなに甘い毒を孕んだ美人なんて人間にはいないけれど。

「魔王というのはこの世界に属する全ての魔族の頂点に立つ存在です。だから最悪最強の力を持っています。どんなに魔族が大勢束になっても私を凌ぐ事はできません。しかし私はなりたての魔王で、生誕100年目に「孵化の儀」を行う必要があります」

「孵化？」

「簡単に言えば成人の儀式のようなものです。ただ、孵化するためには多くの魔力を必要とします。そのためそれまでに魔力を蓄えておく必要がある。十分に蓄えられれば私は完全な魔王として君臨できますが、不十分だった場合、魔王としての魔力は弱まってしまう。するとこの世界のどこかに小さな綻びが生まれ、やがて私が長い一生を終えようとする時、その綻びが大きくなってこの世界は権力争いが始まってしまう。混沌の時代を迎えてしまうのです」

「それじゃあどうやって魔力を蓄えるんですか？」

「伴侶に、私の魔力を少しずつ預けていくんですよ」

「エメラルドの瞳が鋭く光ってエレナの視線を絡めとる。

「えっ」

思わずカップを落としそうになったけれど、それを魔力でラルドが浮遊させた。

ラルドはカップを漂わせて自分のほうへ寄せると、そっと手に取

りサイドテーブルに乗せる。

「ただし伴侶といっても結婚すれば良いという訳ではありません。

心から結ばれていなければ、私の力を預けることはできないんです」

「どうして？」

「同化できないから」

「同化？」

「つまり、魔王と伴侶は魂を同化させるんです。そうして伴侶にも魔王と同等の力を与え、膨大な魔力を蓄えてもらうんですよ」

「魔力を貯めるための器を魔王と共有する、という事ですか？」

「理解が早いですね。その通りです。でも魂を同化させるためには、互いを深く愛し、心から信じあう事が絶対条件になります。そして魂を同化させた魔王と伴侶は、未来永劫互いの存在や想いが魔力の強さを左右する。それだけ大切な存在なんです」

「そしてあなたはその伴侶を探していた、と」

「何よりも大切な存在だからこそ、私は自分の手で探し出したかった。たった一人、私の魂に触れられる人を」

言い終えると同時に長くしなやかな指がエレナの頬に触れる。

温かな指先。

跳ね上がる鼓動。

きつと自分は頭が混乱しているせいでおかしくなっているんだ。

そうでなければ彼の魔力にやられているのかもしれない。

ダイレクトに鼓膜に響く心臓の音は、彼に一瞬で心を奪われたからじゃなくて、きつと頭も心も麻痺しているからだ、と。

思いつく限りの理由を並べ立ててエレナは自分の感情に言い訳をする。

視線は泳ぎだし、どこか落ち着きをなくした彼女を、ラルドは何もかも見透かしたように見つめて小さく微笑った。

「エレナ、私の目をよく見て」

言われるがまま彼の瞳を見つめれば、鮮やかで深い緑色の瞳が次第に淡い月の色に変わっていく。

そして。

触れていたはずの指先は形を変え、目の前にいたはずの美青年はいつの間にか、全身を銀毛で覆われた狼に変わっていた。

信じられない。

なびく銀糸は絹のように柔らかに光沢を放ち、背筋をピンと伸ばした姿はまるで自分が責ばれる存在であり、それに応える事が当然と理解しているかのような高貴さ。

それでいて優しげに、愛しげにエレナを見つめてくる。

三ヶ月近くずっと可愛がっていたあの姿がここにあるなんて。

恐る恐る触れれば手に良く馴染んだ感触があつて、自分を見上げる瞳は紛うことなくあの澄んだ金色。

「ハスキー…!？」

「ウオン！」

「嘘…そんな、それじゃあまさか、ハスキーはラルド様…？」

「そういうことです」

「ひゃっ」

狼の姿で話されるとつい驚いてしまう。

が、エレナはすぐに気を取り直していつもしていたように彼の毛並みをふわりと撫でた。

彼女の華奢な手が触れると少しくすぐったい。

ラルドは嬉しげに身じろいだ。

「本当にハスキーだわ…この毛並みも、穏やかなその瞳も、間違いない」

確かめるように何度も彼を撫でて、そして優しい瞳を覗き込む。

いつも通る公園で、たった一匹エレナを見つめていた。

誰もがその姿を怖いといって近寄らずにいたが、エレナだけは違った。

何故か彼女には彼が笑顔で自分を待っているような気がして、放っておけなかったのだ。

野生なのか野良なのか、それとも飼われているのか分からないが、

気品に溢れた凜とした姿も良く懐いてくれる愛らしさも、両親を亡くしたエレナには大切なものだった。

引き取られた家では叔父にも叔母にも良くしてもらっていた。

大切な家族だった。

けれどどうしても消せない距離が存在していた。

心に空いたままの小さな穴を埋めてくれたのは、公園で出会った彼の存在だったのだ。

「私、もうずっと前からあなたに出会っていたのね」

「はい。これは私の魂の姿。だから大抵の者は恐れ、近づく事さえ出来ません。でもエレナは違った。私に触れ、とても大切にしてくれた。魂が近かったのでしょう。…あなたしかいないと思いました。私の伴侶となるのは」

「…っ」

「でもあなたを簡単に連れ去る事はできなかった」

「なぜ？」

「あなたはたくさんの人に愛されていたし、あなたも周りの人たちをととても大切にしていたから、その場所から突然引き離すような事はしたくなかったです。時間をかけて説明し、きちんと理解してもらってからにしようと思っていました。それが…あんなことになってしまった…」

ラルドは元の姿に戻ると、急に苦虫を潰すように顔を顰め、唇をかみ締める。

どんなに時間がかかっても、エレナの気持ちを何よりも大切にしたいと思っていたのに。

だからこそ上手く彼女の存在を隠してきたのに。

どこからか情報を仕入れた魔族がエレナを狙って攻撃を仕掛けてくるなんて。

「結果的にあなたを傷つけ、こうして強引にこちらへ連れてきてしまった。許してほしいだなんて都合のいいことは言えません。言うつもりもない。あなたから全てを奪ってしまった罪は重い。だから、

私の全てを賭けて、あなたを幸せにしたい。失ったものは戻らないけれど、それと同じくらい、いえ、それ以上に大切なものをたくさんあなたに贈りたい。それが今の私の、正直な気持ちです」

「…ラルド様…」

「伴侶になるかどうかは、あなたの気持ちにお任せします。ですから、あせらずゆっくり考えてください。そしてあなたの生き方を見つけてくれればいい。私は一番近い場所で見守っています」

そう告げるラルドの瞳はどこまでも優しく。

エレナは鳴り止まない鼓動をどうにか抑えながら彼の言葉の一つ一つを噛み締める。

こんな状況になってもしっかり前を向いていこうとするその姿が清々しくて、愛しさを一層増すけれど、ラルドは抱きしめたくなるのを堪えて彼女の肩にそつと手を置くだけにした。

そしていたずらな笑みを浮かべる。

「もちろんあなたが私を好きになってくれるよう、アプローチは続けていきますよ？覚悟していてくださいね？」

エレナも柔らかな笑みを浮かべる。

「ふふ、分かりました」

二人の物語は、まだ始まったばかり。

知らない事ばかりだった。

おとぎ話はたくさん読んだけど、実際の「魔界」は物語の中の世界とは少し違っていた。

この世には天界と魔界が存在し、その中間に人間界が存在しているという。

互いに強力な結界を張り、天界と魔界は相互干渉が出来ないようになっているらしい。

人間界に干渉するのは余程の時だけ。

魔界は出来るだけ天界と関わりたくないからそうしてるらしいが、天界はちよくちよく人間界に干渉する。

自分たちの理想論を押し付けるために。

けれど魔族はそんな事はしない。

確かに「キレイ」な世界ではないかもしれないけれど、「キレイ事」で全てを管理しようと思わず、醜くても情けなくても試行錯誤しながら答えを出そうとする、そんな自分たちの世界に誇りを持っているからだ。

中位以上の魔族たちによる小競り合いはしょっちゅうだし、消滅だとか拷問だとか物騒な事も行われているけれど、それでも天界よりずっとマシだと自負している。

強者が上位に立つ世界だけれど、弱者であつても共存していける世界なのだ。

だからこそ「魔王」であるラルドは孤高の存在でなければいけない。

全ての者を守るために。

エレナを気遣いながら話すラルドは真剣で、熱心だった。

確固たる意志がそこにはあつて、気付けば彼女もラルドの話に引

き込まれていた。

そして

「…この世界については、こんなところでしょうか。すみません、つい話し込んでしまいました」

とラルドが息を吐いたとき、ふと窓に視線を向けると空はすっかり濃紺に染まっていた。

空には幾千もの星がチカチカ瞬いていて。

「おや、もうこんな時間でしたか。今日は疲れたでしょう？夕食はこちらに用意させます。ゆっくり召し上がってくださいね」

そう言ってパチンと指を鳴らす。

「私は少し用事を済ませてきますから、何かある時はダージリンを呼んでください。またお休みになる頃会いに来ます」

「はい」

素直に頷いたエレナに優しく髪を撫でて、ラルドはまたふつりと姿を消した。

変わりにやってきたのは赤く艶めいた髪を縦に巻いて、同じ色の丸い目をにつこりと細めた色白の少女。

歳はエレナと同じか少し年上といったところか。

クラシクなメイド姿で食事の乗った銀色のワゴンを押してきた。部屋の中にふわりと美味しそうな香りが漂う。

少女は一度足を止めるとエレナに向き直り

「本日よりエレナ様付きとなりました、ローズと申します。これから身の回り一切のお世話をさせていただきます。よろしく願います」

と、深々とお辞儀する。

そう、少女、つまりローズはラルドが用意したエレナ専用のメイドだったのだ。

「よ、よろしく願います」

エレナもつられてお辞儀を返す。

ローズはにつこり笑って「お顔をお上げください」とエレナの顔

を覗き込んだ。

「本当に光栄でございます。こんなにお美しくお優しいエレナ様にお仕え出来るなんて！わたくし一生の幸せにございます！！わたくしの事はどうか「ローズ」と、お呼び捨てくださいませ」

「え、あの、でも、ローズさんの方が・・・」

「ああほら！いけません、魔王様のお后様になれるの方がわたくしのような使用人に「さん」付けしてくださいなんて。どうかローズとだけお呼び下さいませ。人間界では一市民であっても、こちらの世界でエレナ様は大切なお方ですもの」

「えっ？」

ローズは変わらぬ笑顔でウィンクして見せる。

その姿が優しく、きらきらしていて。

エレナの頬が自然と緩む。

「ダージリン様から伺いました。エレナ様は人間界のお方だと。だから仕えられることに慣れていらっしやらないし、慣れたとしても感謝の気持ちを忘れずわたくしたちに接してください方だって」

「買い被りすぎ、です・・・」

「いいえ、そんなことはございません。お会いしてはつきり確信いたしました。エレナ様はこれからどんなにこの世界に馴染んでも、悪い方向に変わったたりしない、まっすぐな方です」

「そんな事、な」

「ありますよ？だからとても心配です。まっすぐで強い方だから、全で一人で背負ってしまわれるんじゃないかと」

「・・・ローズ・・・？」

「こちらへ来るまでわたくしは別の心配をしておりました。失われたものがあまりに大きすぎて、絶望に沈んでいらっしやるのではないかと。でもエレナ様は凜としていて、しっかり前を向いておられて。泣いていらっしやなかったから、余計心配になりました」

泣いていたら、ダージリン様の言うとおりすぐにでも抱きしめてお慰めできたのに。

こんなに可愛い方を一人で苦しませたりしないのに。

ローズはそつとエレナの両頬に手を添えて彼女を見つめる。

紅茶色の澄んだ瞳。

柔らかな金茶の髪は絹のようにさらりとなびいて背に流れ、イチゴのように赤く色づいた唇は愛らしさを助長させ、細い首筋は華奢で見る者全ての保護欲をかき立てる。

見た目はこんなにか弱いのに、芯の強さは一体どこから来るのだろうか。

「少しの間、お許しくださいませ」

小さくささやいてローズはエレナを抱き寄せる。

「ローズ……」

されるがまま彼女の腕に収まって、エレナは大人しく温もりに目をつぶる。

まるで幼い頃、母がそうしてくれたようにローズの腕は優しく、ほんの少し胸を締め付ける。

「どんな事があってもわたくしはエレナ様の味方です。いつでも甘えてください。遠慮も理由も必要ありません。無条件で甘えてください。そういう存在が一人くらいいてもいいでしょう？」

「ありがとう、ローズ」

「いいんです。いいんですよ、エレナ様」

——心に決めていたんです。

あなたが必要としてくださるのなら、私はいつでも何度でもこの手を差し伸べようと。

かつて幼いあなたが私を助けてくださったあの時からずっと、いつかもう一度会えたら、その時は必ず私がおあなたをお守りすると。ローズはしっかりとエレナを抱きしめて、ほうつと息を吐く。

そうして暫く腕の中であやした後、静かにエレナを開放して

「お腹が空いたでしょう？冷めない内にどうぞ」

ワゴンに乗せた食事をテーブルに用意して、幾分赤くなったエレナの瞳をハンカチでそつと拭った。

恥ずかしそうにはにかんで、エレナは温かなスープに口をつける。その温度も味も、じんわり胃に染み込む感じがして、なんだか無性に泣きそうになる。

鼻の奥がつんとして、目頭がぎゅっと熱くなつて。

気付いたローズが優しく拭ってくれるのが余計涙を誘ったりして、せつかくの美味しい料理の味も分らないくらい泣いてしまうけれど、優しさが満ち溢れている事だけは痛いくらい分かっているから、エレナは心底嬉しくなつて笑顔を浮かべた。

そしてようやく夕食を終えたエレナはローズに案内されるままお風呂に入り、帰った部屋のベッドに用意されていた寝巻き（ひらひらしたネグリジェのようだ）に袖を通すと、早々にベッドへ促されて横になった。

また明日の朝起こしに来てくれると約束してローズは退室してしまふ。

入れ替わるようにやってきたのはラルドだった。

気付いたエレナは体を起こすと、サイドテーブルに外しておいたマラカイトの首飾りを手にとってラルドに差し出す。

「ラルド様、これ、ありがとうございます」

こちらへ来てすぐに着けてもらったが、無事に夜を迎えたため、会えたらすぐに返そうと思っていたのだ。

それを見たラルドは一度動きを止めてから、合点がいったように頷いて

「おや？それはあなたに差し上げたものですよ。持っていてください」

「え？」

「なによりそれはお守りですから、あなたに持っていていただかなくては」

エレナに首飾りを持たせると、そのまま手の中に収めて握らせる。「あ、ありがとうございます」

「いいえ、このくらい気にする必要ありませんよ」

この世界の王ともなれば装飾品の一つや二つ、消耗品を買うのと変わらないほどの財力を誇る。

もちろんごくごく平凡な一般家庭に育ったエレナにそれは想像もつかない感覚だから、普通に生活していれば一生触れることがなかったかもしれないものを簡単に贈られて、内心あたふたしてしまう。魔界における貴族の娘たちは競うようにして高価なものを当たり前のように買いあさって着飾るから、エレナの反応は新鮮で、そして好印象を増すばかり。

ラルドはもつと彼女の様子を眺めていたと思ったが、今は夜も更けた頃、これからいくらでも一緒にいる時間は作れるだろうと思いき直して、本来の用件を告げることにした。

「実は眠る前にもう一つだけ贈らせて欲しいのです」

「……？」

ふいに真剣になったラルドに、エレナは首をかしげる。

そんな仕草も愛しさをかき立てるだけなのだが、ぐっと堪えてラルドは続ける。

「この世界はあなたが思うほど残酷な場所ではありません。でも同時にあなたが思う以上に危険な場所です。特にあなたが私が連れて来た花嫁候補だと知れ渡った今、危険は常に付きまとっていると言つてもいいでしょう。ですからあなたを守るために、私の真名を贈ります」

「ま、な？」

「真の名前です。魔界では真の名前には言霊が宿ります。真名を贈ると言う事はいわば私が必ずあなたを守ると言う契約の証。どこにいても私はあなたを守ることが出来る。つながっていられる」

言われもない誹謗中傷だけならまだしも、魔力を使える者が日に何十人と訪れるこの城で魔力を持たないエレナは無防備すぎる。

さまざまな理由で魔王の伴侶の座を狙う者は御万といえるのだ。

強力な魔力を持つ彼らの手にかかれば、エレナを陥れたり傷つけ

る事など赤子の手をひねるより簡単だ。

そんな事は許さない。

エレナを守り抜くためにもこれは不可欠な契約なのだ。
そう告げて耳元に唇を寄せた。

「いざという時は心の中でギアと呼んでください。決して声に出してはいけませんよ？これは私とあなただけの秘密の呪文ですから」
「……はい……」

近すぎる距離のせいで感じ取ってしまった彼の熱に、浮かされたように頷くエレナに笑いかけて、ラルドは「おやすみなさい」と前髪を撫でる。

これでいつ攻撃されてもエレナの身はラルドの魔力で護られる。
重なり合う二人の視線。

そしてエレナは早くなる鼓動を聞きながら、自分の意思よりも先に訪れた眠気に襲われて目を閉じた。

長いまつげにラルドは口付ける。

小さく小さくエレナの心のかけらを奪いながら、穏やかに、嬉しそうに。

続く

vol.5 グッドモーニング

翌朝、窓から差し込む淡い光に誘われて、エレナは誰に起こされるでもなくぼんやりと目を覚ました。

薄水色の透き通る空と、まだ世界が起きる前の穏やかな朝日が目に心地よい。

ベッドから上体だけを起こしてぐっと伸びをする。

まるで昨日までの全てが夢だったのではないかと思うくらい、静かな朝。

暖かい毛布の中から抜け出して窓際へ行くと、眼下で揺れる緑が眩しい。

時計がないせいで何時なのか分からないけれど、庭園にも人影がないということは、まだ早朝といえる時間なのだろう。

それにも拘らず迷路のような垣根の方へ視線を移せば、すでに小柄な男性（と思しき人）が大きな剪定ばさみを使いながら木々を整えている。

そしてその垣根の向こうを見れば、驚くほど純白の大きな馬が一頭のんびりと歩いている。

背中には見覚えのある姿。

「ラルド様？」

エレナは彼に視線を向けた。

朝日を反射して光り輝く銀の髪はまるで月のように穏やかな金色に見える。

馬と一体になって走り出す姿は一陣の風のように。

思わず目を奪われてしまう。

ひんやりした窓ガラスに手のひらをついて、少し遠い場所で馬を繰るラルドに鼓動まで早くなった。

「不思議な人」

呟いた言葉と笑顔が同時にこぼれる。

脳裏には「白馬の王子様」というありきたりなフレーズが浮かんだが、「魔王」というよりずっと彼には似合っていると思う。

どうしてあんなに紳士的な魔王になったのだろう。

一体どんな風に育ってきたのか知りたくなる。

そうしてエレナが窓の外にいるおよそ魔王らしくない彼に思いを馳せていると、小さくノック音が聞こえて「はい」と短く返すと、明るい表情でローズが入ってきた。

「お早うございます、エレナ様。今日のお召し物はいかがでしたますか？」

壁一面（恐らく10メートルはあろうか）にあつらえられたクロ―ゼットの扉をがらりと開けて、中に用意された何百着というドレスを披露する。

「…」

呆氣にとられたエレナは呆然とその前に佇んだ。

まるで数百色揃った絵の具セットのような色合いのドレスたちは、全て違ったデザインで作られている。

見た事もないような数のドレスに圧倒され、当然のように選び始めることなど庶民体質のエレナには出来そうもなく、むしろこの中から選べという方が酷かもしれない。

眩暈がしそうだ。

が、早くもエレナを溺愛し始めているローズは、見ている方が照れてしまうくらい目を輝かせてドレスを選び始めている。

「こちらは全て陛下がエレナ様のためにご用意下さったものです。

どれもお似合いになりますよ？どれにいたしましょうか」

「と言われても、どうしていいか…」

「まあ。遠慮なさらなくてもよろしいのに」

と言いつつも、いざわたくしの出番！と言わんばかりに早速最初に目に飛び込んだドレスの前に立つ。

「そうですねえ、お困りでしたらこちらはいかがですか？」

取り出したのはビロードに似た生地で作られた、深紅で細身のド

レス。

襟や袖、裾には金糸の刺繍が施されている。

合わせてローズが用意したのはイエローダイヤモンドがアクセントの花柄の首飾り。

ペアのイヤリングもある。

そしてローズはエレナの返事を待つ事なく着付けていく。

お守りとしてラルドから贈られたマラカイトの首飾りは、いまや細く白い腕に腕飾りとして巻きつけられていた。

あまりの豪華さに気絶しそうになったエレナは何とか意識を保つので精一杯だ。

返事をしようにも喉がカラカラになってとても返事が出来る状態ではない。

それを好都合に捉えたローズは上機嫌で鼻歌混じりにヘアメイクまで手早く仕上げた。

鏡の前に座るエレナは、徐々に完成していく自分を見て目を疑いたくなる。

頭のとっぺんからつま先まで、一体いくらかかっているのだろう。もしやこうしたドレスや装飾品を毎日とつかえひつかえ身に付けることになるのだろうかと思うと、急に意識が遠のきそうになる。

けれど何故かドレスはエレナにぴったりフィットしていて、鏡の中には支度を終えたばかりの見た事もない姿の自分がいる。

背後ではローズがうつとりエレナを見つめていて、なんだか胸の辺りがくすぐつたい。

「本当にお美しい…。早速陛下にお見せしなければ！さあ、朝食に参りましょう！」

少しはしゃいでエレナの手を引くローズに微笑みながら食堂へ向かった。

よく磨かれた大きな扉は重厚な茶色で輝き、力いっぱいローズが押し開けるといかにも厳かな音がした。

中には何十メートルあるか分からないような長く厚みのある大理石のテーブルが置かれ、食欲をそそるようなオレンジ色の光沢があるテーブルクロスがかけられている。

並べられた椅子は背もたれが座高より大きめにつくられていて、手触りの良い短めの毛で覆われた豪華なものだ。

一際目を引く細工が施された椅子は一番奥の席に二つ並べられ、片方にはすでにラルドの姿があった。

慣れた仕草で片手を挙げられ、エレナは自然と小さく会釈する。

ローズは「こちらですよ」とどんどん奥へ彼女を案内した。

なんとなく予感はしていたが、やはり。

「おはようございます、エレナ。深紅が良く似合っていますよ、とても美しい」

「お、おはよう、ございます」

連れて行かれたのはラルドの隣。

椅子を引かれてふわりと着席すると、エレナは落ち着かない様子で辺りを見回した。

驚いた事にここにはエレナたち以外はダージリンしかないようだ。

きょとんとしたエレナにラルドは微笑みかける。

「朝食は今まで私とダージリンだけでした。今日からは三人ですね」

「あ…はい」

ちよこんと座るエレナは彼と目が合った途端に顔を赤く染める。

あまりに美しすぎるラルドの姿は瞳に映すだけでも大変なのだ。

それに気付いたラルドとダージリンは目を合わせて笑みを交わす。

「魅了^{チャーム}」などという魔法を使わなくても、ラルドの表情はエレナに十分過ぎるほどの魔力を持っていた。

ただでさえ豪華な家具に囲まれ、「広すぎる」などという言葉では表せないほど広い食堂と慣れない環境で緊張しているエレナは、ともすればしどろもどろになりそうな自分をどうにか抑えて畏まったまま食事を待つ事になった。

ほどなく運ばれてきた朝食に三人は「いただきます」を言うと、早速フォークを手に取る。

緊張して微かに手を振るわせるエレナも小さな口を一生懸命動かしている。

そんなに強張っているのは味も分からないだろう。

ラルドはいたたまれなくなつて

「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。ここは確かに広いし家具も豪華に見えるかもしれませんが。でも食事時は私たちしか使いませんから」

そう微笑みかける。

エレナはくりとした瞳を彼に向けた。

「えっ？こんなに椅子があるのに？」

長さも厚みも十分なテーブルの両側に、十脚以上の椅子が並んでいる。

「もちろん例外はありますよ？大臣との会議や会食などはここで行いますから」

「そっか、それで席がたくさん用意されているんですね」

「ええ」

あつさり肯定されて、もしや自分もその会食に参加する時が来るのだらうかと、再び意識が飛びそうになる。

が、次に見えたラルドの微笑でエレナは我に返った。

「大丈夫ですよ、どんな時でも私が必ず隣にいます」

その言葉がどれだけエレナを安心させた事だろう。

「はい」

浮かべられた満面の笑みに今度はラルドが頬を赤らめた。

なんだかんだ言つてこれが彼にとって初めての恋である事を知っているダージリンは、初々しい二人を見ているとまるで保護者のような気になってくる。

黙っていても女性が寄ってくるラルドは適当に女性の相手をした事があるにもかかわらず、本気の恋愛はしたことがなかったのだ。

飄々とプレイボーイらしくアプローチするのかと思いきや、本性は意外なほど一途だったのかと今更ながらに思う。

助け舟も出たくなると言うものだ。

「お二人ともこの後乗馬でもなさってはいかがですか？陛下の愛馬にもエレナ様をご紹介なさっては？」

つい口を開いていた。

するとラルドも頷いて

「そうでした、ルシファーにぜひ紹介しなくては。エレナ、どうです？朝食を終えたら厩舎へ行きませんか？」

と提案する。

エレナは「あ」と思い出したように

「あの、もしかしてルシファーって真っ白で大きな馬の名前ですか？」

そう問いかけた。

今朝窓越しに見たあの姿がよみがえる。

「ええ、私にとって最高の名馬です。彼ほど美しく賢い馬はないでしょう」

「ルシファーにぜひ会わせて下さい」

元来動物好きのエレナも目が輝きます。

こうして朝食後の予定はあっさり決定したのだった。

続く

vol.6 白馬の墮天使

厩舎は事の外広い、まるで農村にある牧場のような規模だった。係りの者も二十人はいるだろうか。

対して馬の数も100は下らない。

中央に通路があり、両側から向かい合うようにして馬たちが顔を出している。

その馬の大きいこと、大きいこと。とにかくでかい。

今まで見てきた馬と比べたら1.5倍はあるだろうか。

顔、首、胴体、脚、全てが一回り以上大きくがっしりしているのだ。

鼻息荒く、つぶらな瞳はギリリと猛々しく光っている。

ただの馬でない事は一目瞭然だ。

馬を見に来たはずのエレナの方が彼らに観察されているような、品定めされているような、そんな気になってしまふ。

彼らは毛色ごとに並んでいた。

毎日ここへ来ているラルドは流れるように優雅な足取りで、どんな奥へと進んでいく。

が、不思議な事に歩幅の小さなエレナでも、ゆったりとついていける速さだ。

どうやら彼女の歩調に合わせてくれているらしい。

そんな些細な気遣いも嬉しくなる。

ふわりと心が浮き上がって足取りも軽くなる。

辺りを見回せば傲慢な態度でこっちを見下ろしている馬ばかりだが、視線が合うと急に大人しくなって穏やかな目をするから、最初はびっくりしていたエレナも少しずつ慣れてくる。

そうして長い通路を暫く歩いた後、ラルドはぴたりと足を止めた。「ここにいる馬たちは主に戦闘用なんですよ。いかにもそんな感じ

がするでしょう?」

「ええ。雄々しくて勇敢そうな馬ばかりですね」

エレナの言葉に馬たちは拍手の代わりに脚を鳴らし、雄たけびの代わりにボフツと鼻息で応える。

良く分かつてるじゃねえか、ネエちゃん！

まるでそんな雰囲気だ。

馬たちの空気を察しているラルドは彼らを一瞥してから、人馬関係なしに魅了してしまうエレナの愛らしさに得意げになったが、普段は主と乗り手以外に懐かない彼らが喜んでエレナに鼻先を向けている様子を見た途端、ダンツと思い切り地面を蹴飛ばして牽制した。所詮彼らも「オス」ということか。

馬の分際で。

エレナには見せない「魔王」気質を心の中で曝け出し、地面を滑るような足取りで馬たちの前に歩み出る。

ただならぬ殺気を感じ取った馬たちは水面を打つように静まり返った。

「さて、そろそろルシファアのところへ行きましょうか。彼もあなたを待っていると思いますよ」

百戦錬磨の勇ましい馬たちを凍りつかせるほど冷めた微笑を浮かべて、ラルドは目の前にある大きな扉を押し開けた。

まるでギリシャの神々が住まう神殿かのような、白い大理石で造られた重厚な建物の中にいたのは、思わず息をのんでしまうくらい美しく強かな一頭の白馬だった。

大きさは今まで見た馬たちとさほど変わらないが、彼らのいかにも戦闘用というようないかつさは微塵もなく、柔らかく滑るような白い毛並みは美しく輝き、青い瞳は穏やかに主たちを映し、自分が最も高貴なる者の一族であることを理解しているかのように誇り高い存在として、そこに佇んでいる。

主であるラルドに頬を寄せる仕草でさえ、連続した絵画を見てい

るような気分になる。

彼はラルドの横ですっかり魅了されているエレナのことにも気に留め、青空を閉じ込めたような瞳を彼女に向けた。

そして、くん、とお辞儀のような仕草をしてから頬を寄せる。

エレナが細い指ですらりと通った鼻筋に触れると、ルシファーは気持ちよさそうに瞳を閉じる。

”貴女はとても心地よい香りがする。私は主と貴女だけに忠誠を誓おう。いつでも私を呼べ。さすれば貴女を我が背に寄せ、風のように大地を駆けよう”

「ルシファー？」

不思議な声だった。

心の深い場所に静かに響き渡るような、優しく甘やかな声。

それは空気を通ることなく、彼女の心にダイレクトに伝えられる。初めて聞いたはずなのに、確信できる。

間違いなくこの声はルシファーのものだ。

エレナの視線は美しい白馬に固定されていた。

そして隣にいたラルドはすぐに理解する。

まさかエレナもルシファーの声を聞けるなんて。

こんな奇跡が本当にあるのだろうか。

ラルドは驚きながらも喜びを隠せない表情で満足げに頷く。

「あなたも彼に選ばれたようですね、エレナ」

「選ばれた……？」

ラルドは相場のそばへ歩み寄ると、鼻筋をスツと撫でてやる。彼がこの馬と出会った時も同じだった。

城に閉じこもってばかりの王になどなりたくなくて各地を旅していた時、たまたま立ち寄った泉に突如現れたのがルシファーだった。

”私の主になれ”

あまりに気高く美しい、その強かな姿にラルドが見惚れていると、どこからかそんな声が聞こえて、ルシファアは以降ずっと長い旅路を共にしてきたのだった。

例の声がルシファアのものであると理解できたのは、芯の通った確固たる強さを持つ声音とその姿が合致したからだ。

もちろん彼の声を聞き取る事ができたのは今までラルド一人だった。

側近であるダージリンにさえ彼の声が聞こえたことはない。

この気高く主に忠実な愛馬は己の意思で相手を選んでいるらしい。出会って自ら「ルシファア」と、偉大な魔界創設の王と同じ名を名乗った彼には、確かに大いなる秘められた力がある。

そのルシファアにエレナも選ばれたことが誇らしい。

自分の選んだ相手に太鼓判を押されたような気がして嬉しくなる。ある種しつかりと安定した自信につながったのかもしれない。

私の目に狂いはない、と。

「ルシファアは自らの意思で主を選ぶようです。こうして会話する相手も。つまり彼の声が聞こえると言う事は、あなたも彼に選ばれた特別な人、ということですよ」

「特別……」

「あなたが魅力的なのは元より承知していますが……戦闘用の彼らにしろルシファアにしろ、魔界の動物たちまで魅了してしまうとは。まだ隠された力がありそうですね」

本来人懐っこさとは対極にある彼らがすんなり懐いた事も、そして偉大なる王の名を持つこのルシファアに選ばれた事も、なにより魔界の地に抵抗なく（つまり身体的な拒絶反応を見せることなく）馴染んでいる事も、全てが普通の人間とは異なっている。

ラルドは気付いていたそれらを言外に告げて微笑を浮かべた。

魔王の伴侶である事自体特別な事だが、それでも異界の人間となれば魔界の空気は身体に何かしら影響を及ぼすものだ。

程度に違いはあれど、自覚症状が出るはず。
しかしエレナにそんな素振りはなく、顔色も昨日よりずいぶんよ
くなっている。

恐らくラルドたちが思う以上に特別な何かを持っているのかもしれない。

人間として生まれながら魔王の「伴侶」である事が既に「前代未
聞」の事態なのだから。

そのエレナは今、ルシファーに促されて厩舎が建つ丘の端へ行き、
心地よい風を全身に受けている。

ふとラルドの胸に不安とも心配ともつかない思いがよぎる。

彼女の悲しみは少しでも癒えただろうか。

二度と戻れなくなつた故郷を恋しく思ったりしているのだろうか。
もう一度帰りたいと、願っているのではないだろうか。

視線の先で髪をなびかせて、気持ちよさそうに風を感じているエ
レナは穏やかな横顔。

彼女を見つめるラルドの横にルシファーは並んだ。

”案ずるな。彼女は我らが月乙女^{つきおとめ}。心も身体もこの地を離れる事は
ない”

「月乙女…？まさか、本当に、彼女が…？」

”全て真の事。そなたの力は揺るぎないものとなる。そしてまた彼
女も…”

ルシファーはそれだけ告げると厩舎の中へ戻っていった。

ラルドは再びエレナに視線を向ける。

魔界において月は全てを司る物。

そして「月乙女」とはいつ現れるとも知れなかった、幻の存在。

魔界にとって、魔王にとって、この世界全ての均衡を保つ者。

世界を創造し、破壊する力さえ手にする者。

その出現は魔王の存在を確固たるものとし、世界の繁栄を約束す

る。

けれど。

月乙女が現れるのはこの世界のひずみが大きくなり、危険に瀕しているという証。

ラルドは自分が感じていた違和感が的を得ていたものだ と確信する。

嫌な予感は当たっていたのだ。

旅している間にそれを見つける事は出来なかったが、やはりこの世界にひずみは存在していた。

そして十分な伴侶を得られぬまま、何代もの魔王がこの世を去り、小さかったはずのひずみは気の遠くなるような長い年月をかけて、この世界を混沌に導くほどの大きさまで広がっていたのだ。

このタイミングで出会うとは。

これから起こるであろう数々の危険に、自分の意思とは関係なくエレナを巻き込む事になってしまうという一抹の不安を胸に、ラルドは決意を新たにするのだった。

続く

Vol.7 穏やかな日常

緩やかなまどろみの中、夢現で浮上する意識を覚醒させようと視線を動かすと、心地よい朝日が一日の始まりを告げる。

エレナの朝は穏やかな空気の中で始まった。

こちらの世界に来てからというもの、見渡す限り美しいゴシックな庭園とふわふわと淡い光の粒子が舞い踊る幻想的な景色の広がるこの「魔王城」で、エレナはゆったりと一日を過ごしていた。

毎朝目覚めてからしばらくして意識がはつきりしてくると、まるで測ったかのようにぴったりのタイミングでローズが現れ、手際良くエレナの支度を整えてくれる。

今まで自分のことは自分でしてきたエレナはローズからドレスの身に付け方を教えてもらうと、髪を結ってもらっている間に、選んでもらったドレスを身につける。

それが終わると次は化粧を施される。

仕上には唇に輝きを付け足す優しい色合いのルージュを引いて、ローズは満面の笑みを鏡越しにエレナに向けた。

「今日もお美しいですよ、エレナ様」

「ローズのおかげ。ありがとう」

魔界で暮らし始めて2週間と少しが経った今では、すっかり二人の距離も縮まっている。

本来魔界の貴族であれば、令嬢には必ず侍女が数人ついて身の回りの世話をするのが通常だが、ラルドはエレナの性格を考慮してくれらしい。

あまり侍女が多いと恐縮してしまうと思ったのだろう。

今のところエレナ付きの侍女はローズ一人だ。

本人が望めば何人でも侍女を増やすことができるらしいが、エレナはそれを丁重に断っていた。

ローズへの負担が軽くなると考えれば幾人か増やすほうがいい。

けれど今はまだ、新しい侍女たちと仲良くなるための気力を出すのは難しい。

どんなに健気に明るく振舞っていても、心に空いた穴を埋めるのにはもうしばらく時間がかかる。

「どうしますか？ローズは筆頭侍女ですから彼女が選ぶ侍女なら信頼できるでしょう。あと数人、侍女を雇いますか？」

「陛下、お気持ちは大変嬉しいのですが、その件は保留にしていた可以吗？」

二人に対するラルドの優しい問いかけを断ったのは、ローズだった。

主であるエレナが乗り気でないことを理解した上で、柔らかな口調でありながら、はっきり告げる。

まっさきに心を占めたのはエレナへの想い。

（エレナの知識の中では）魔界だとは思えないこの平和で穏やかな世界へ来てから、エレナは心身ともに落ち着いている。

枕を涙で濡らすような夜を過ごすことはないし、落ち込んで塞ぎ込むようなこともない。

気が向けば色とりどりの花が彩る庭園に降りて散歩をしたり、すっかり仲良くなった白馬のルシファーと草原をゆったりと駆け回ったりすることもある。

天気の良い日は書庫へ行き、魔族文字で書かれた書物を持ち出し勉強を進めている。

合間には執務で忙しくしているラルドへお茶の準備をし、人間界でよく作っていた焼き菓子を厨房にいる料理長たちと用意する。

ともすれば休憩することも忘れて執務に没頭するラルドに声をかけられるのは、腹心のダージリンかエレナだけ。

ところが放浪に出かけていた間に溜まった仕事はラルド一人の手には余る。

ダージリンも率先して執務を手伝っているのだ。

そこで休憩を告げるのはすっかりエレナの役目になっていた。

決して慌ただしく過ごしているわけではない。

彼女のペースで一日を思うままに過ごせている。

そうして過ごす中でこの城での暮らしに慣れ、悲しみを紛らわせてはいるが…。

元々周囲に気を遣いながら生きてきたエレナは無意識の内に、自分と接する相手を優先させてしまう。

心の中に沈む悲しみも、どこかで置き去りにしているのではないだろうか。

周りの幸せを願うエレナだから、自分の中にある負の感情を誰にも見せずに乗り越えようとしているのだ。

侍女が増えればそれこそ侍女たちのことを気遣い、当たり前のように自分の感情をしまい込むだろう。

そうして笑顔を浮かべるに違いない。

ローズは思い至って、胸を締め付けられる。

誰より大切なエレナには、心の底から笑っていて欲しい。

彼女のそばで役に立てることは幸せであって負担など一切ない。

そもそもエレナは自分で出来ることは自分でやってしまうのだ。

ローズの役目といえば彼女の支度を整えることと、健康管理に気を配ることと、見守ること。

でも一番光栄なこと。

思いを告げたローズを見つめていたのは、心底嬉しそうなエレナの笑顔だ。

ラルドもそれを見て笑みを深くする。

理解者であり、親友のようなローズの存在はエレナにとって救いになっている。

そんな経緯もあって、相変わらずエレナの侍女はローズ一人だった。

けれど温かな二人きりだ。

朝はゆつくりと優しく過ぎていく。

今日も一日が、始まる。

湯気がゆらゆらとのぼる温かな焼きたてのクロワッサンのサンドウィッチはレタスとハム、それに卵が挟んである。、シャキシャキと歯ごたえのあるレタスは新鮮そのもので、ともに挟まれた卵はマヨネーズで丁寧になめられており、薄味だがそのまろやかさが嬉しい。

目覚めたばかりの胃に負担のかからないよう、料理長は常にラルドやエレナの体に気を配ったメニューを提供してくれる。

一緒に出されているスープも、たくさんの野菜とほんの少しの肉を長い時間かけて煮込み、栄養満点なエキスが余すところなく溶け込んでいる。

しかも食卓に上がる野菜は全て、城の敷地内にある菜園で厨房で働く全員が丹精込めて育てているのだ。

もちろん寮長自らも毎日菜園へ出かけては手入れをしているほどだ。

そうしてたくさんの人の手で作られた朝食に感謝して食事を終えると、ラルドとダーズリンは執務室へ向かう。

エレナは二人を見送ってから、庭園へ足を向けた。

いつも庭園を管理している庭師が小さな花の種をくれたのは最近のこと。

せっかく庭園に来るなら自分で植えた植物を世話するのも楽しいものだ、エレナに似合う花を選んで種を分けてくれたのだ。

どんな花が咲くのかは、咲いてみてからの楽しみだと内緒にされている。

植えてから数日経った今では小さな芽がいくつも顔を出していた。日に日に大きくなっていくのが見て分かる。

太陽の光を全身に浴びようと葉を広げる双葉にそつと触れて、エレナは思わず笑をこぼした。

その様子を執務室から眺めるラルドもまた、穏やかに目を細めていた。

今日も数時間頑張ればエレナがお茶を入れてくれる。

仕事机の上にはいくつもの書類タワ―。

「さて、がんばりますかね」

誰に言うともなく呟いて、ひとつ伸びをする。

ダージリンはそんな主を見ながら微笑んで、再びペンを走らせた。

続く

Vol. 8 目覚め始める力

事件が起こったのはエレナがこの世界に来てから一ヶ月と少しが経ったその日、ラルドが日々追い立てられている雑事をこなしてしまおうと執務室に入って二時間が経った頃だった。

魔王城には一日何十人も来客がある。

特に最近増えたのは、魔王目当ての女性客とその親だった。

放浪の旅から魔王が帰還した事もあるが、さらにエレナが存在が彼らの焦りを煽ったのだらう。

正式に婚約を結ぶ前なら自分たちにも可能性がある、意気込んで売り込みにくるのだ。

” そんな人間の娘でなく由緒正しき魔族を伴侶に ”

と。

面倒な来客者たちではあるがそれらを構うほど暇でもないラルドはさりと彼らを受け流し、早々にお引取り願うが、厄介なのはその後だった。

彼らは帰り際の城内でエレナを見かけると、嫌味や悪口をあからさまに言い放って侮辱し、さらには魔族と人間の違いを見せ付けてやろうと魔法を使い、エレナに嫌がらせを施していくのだ。

そうして魔族であることの優越感に浸り、高笑いを響かせて帰っていく。

ラルドにとってそれは逆効果であるということも知らずに。

嫌がらせは人間界でよくありそうないじめと似たようなものだった。

突然頭上から大量の水が降ってくるとか、鼻をコブタのそれに変わらされてしまつとか、巨大な檻や鳥かごに閉じ込められてしまつとか、しゃべる言葉をすべて動物の鳴き声に変えられてしまつとか。

聞きつけたラルドはすぐに駆けつけてその魔法を解いてやるのだが、当のエレナが「気にしていません」と流してしまう上に「処罰を下すほどのことでもありませんよ」とやんわり釘をさすから、ラルドは厄介な客人たちを罰する事もできず、いつそ職務以外での城内立ち入り禁止令を出そうかと本気で考え始めた頃、「その時」は訪れたのだった。

執務の合間に休憩するラルドにダージリンが紅茶を入れた、まさにその時だった。

「キヤーツ!!」

「!!?」

明らかに廊下からだわかる近距離であがった悲鳴と、一瞬の轟音、それが耳に入った途端二人は執務室の扉を勢い良く開け放ち、声のした方へ視線を向けた。

「エレナ!？」

間違えるはずのない愛しい彼女の姿を探し、すぐさま駆けつける。そこには全身ずぶぬれになって床に座り込み、身体を両腕で抱え込むエレナの姿があった。

頭のとっぺんからつま先までびしょぬれだ。

”っ!!”

白色の薄い生地で縫製されたドレスはびたりと肌に張り付き、身体の線を浮き彫りにする。

丸みを帯びた緩やかな曲線は扇情的にエレナの女性らしさをことさら際立たせている。

思わず吹っ飛びそうになる理性をどうにか引き止めて、ラルドは瞬時魔法を発動させるとエレナの姿を真っ白な子猫に変えて抱き上げた。

「これは一体…」

水浸しになって変色した絨毯と、ところどころに水溜りの残る廊下を見つめてダージリンが呟く。

そこにはエレナと同じようにずぶぬれになりながら気絶している

何人かの魔族たちがいて。

毎回ラルド目当てに押しかけてくる来客者たちだと気付く。

しかしなぜこんな状況になったのだろうか。

今までなら嫌がらせて濡れ鼠にされてしまうのはエレナだけだった。

それが今回は彼女たちまでずぶぬれで、しかも気絶しているなんて。

明らかにおかしい状況だ。

そしてさらに疑問なのはエレナ自身である。

魔族である彼女たちが気絶するほどの水流に飲み込まれながら、なぜエレナだけが気絶せずに済んだのか。

ラルドの手のひらの上で身体を震わせている子猫の彼女を見つめて首をかしげた。

突如子猫に変身してしまった事に驚いているのか、小さなエレナはきよるきよる顔を動かしている。

そんな彼女を優しくタオルで包み込み、全身についた水滴を丁寧に拭うラルドは神妙な顔をしていた。

「ダージリン、どうやら乙女は目覚め始めたようですね」

「目覚めた…？いえ、それ以前に乙女とは…まさか…」

「ええ、エレナは月乙女ですよ。真正正銘の」

あまりの衝撃に目を丸く見開いて唖然とするダージリンに、ラルドは小さく微笑んで見せた。

タオルに包まれていたエレナの毛並みはすっかりふわふわと乾いている。

短く「みや？」と鳴いて、ラルドに問いかけているようだった。

「大丈夫ですよ、部屋に着いたら元に戻します。あのままの格好は私の心臓に悪いものですから」

そんな冗談で答えて、ラルドは手のひらにエレナを乗せたままふつと姿を消した。

ダージリンは二人の姿が消えても佇んでしまう。

夢にも思わなかった。

あの伝説を目の当たりにするとは。

しかも彼女はずっと人間界にいたというのに。

けれど、本当に彼女が「月乙女」なら、目の前に広がる光景も納得がいく。

突然力を発動させたせいで制御できなかったのだろう。

魔族である彼女たちを気絶させるほど強い力を放ち、自分もびしょぬれになった。

エレナが気絶しなかったのはひとえに彼女が発動させた魔法だからだ。

が…。

これほど強力な力を発動させたとなると、彼女にかかる負担も大きいはず。

ダージリンはすぐに踵を返すとそのままとある場所に転移したのだった。

自室に戻るや否や、どこから聞きつけたのか、心底心配そうに表情をゆがめたローズが出迎えてくれて、あっという間に着替えさせられるとそのままエレナはベッドに押し込まれてしまった。

もちろん人間の姿に戻っている。

なぜベッドに入らなければいけないのか分からないまま、戸惑いの視線をラルドに向けると柔らかな微笑で、留まるように頷かれる。「エレナ、今日だけは聞き分けてください。退屈かもしれませんが、今はあなたのことが心配です」

「ラルド様…」

不安げな視線を向けられて、ラルドはもう一度深く微笑み返す。突然の事に状況を把握できないエレナの気持ちはよく分かる。

あれほど大きな力を発してもなおこうして正気を保っているのは、エレナの持つ潜在能力の大きさの証。

けれど油断は禁物だ。

「あの時何が起こったか分かりますか？」

「……いいえ。気がついたら洪水が押し寄せてきて、飲み込まれていました」

「洪水に飲み込まれる直前、何を目にしましたか？」

「え……と……あ、たしか中庭の噴水が見えました。彼女たちが何か唱え始めて、また何かされるんだって気付いたから、私にも魔法が使えたら自分でどうにかできるのに、って……」

「そう思った直後、洪水が起こった？」

「はい」

「なるほど」

やはり、と確信する。

エレナの思いが水を呼び寄せたのだ。

五大元素である「水」と契約も結ばずに力を発するとは。

このままいけば恐らく残りの元素も自在に操れるだろう。

無意識に発動させてしまう前に伝えておかなければ。

ラルドはエレナの横にふわりと腰掛けて、乾きたての柔らかな髪を指で梳くように撫でた。

「あなたはとても不思議で、素敵で、素晴らしい」

「？」

「もう魔法が使えるんですよ。エレナ」

「えっ？」

「魔族であつても普通は契約を結んでから五大元素の力を操れるようになります。五大元素とは火・水・土・風・光と闇の事で、これらの力を使えるのは魔族の中でも高位の者だけ。まして全てを使役できるのは大臣クラスだけです。でもあなたは契約なしに水の力を使役した。それもかなり強力な力を、です」

「まさか、私が、魔法を……？」

「ええ。初めてなのに、あの力。驚きました」
言葉と裏腹に穏やかな声でラルドは言う。

エレナが浮かべる戸惑いを少しでも軽減してあげたい。
が、事実は彼女が思うよりもっと重要な事だった。

恐らく魔族の間には今日のことが瞬く間に広まるだろう。

そうなれば今後はただの悪戯では済まなくなる。

本気でエレナを消しにかかる奴等が出てくるはずだ。

彼らにとってエレナの力は脅威でしかないのだから。

そして彼女自身にとっても、これから無意識に力を使い続けることは危険だ。

ラルドはエレナが「月乙女」である事を知ってから考えていた事
を実行する事にした。

優しく彼女の額に触れる。

「今度、水の精霊を訪ねてみましょう。きっと快く話してくれる
はずです」

「人間の私が訪れても？」

「ええ。あなたの気持ちに反応して力を貸したくらいですから、向
こうもあなたに好意を持っていると考えて間違いない。楽しみにし
ていてくださいね」

「はい」

素直に頷く彼女は、この世界に来てから初めて城外へ行ける事に
少しだけ喜んでいようだった。

そして安心したのかまぶたがゆっくり閉じていく。

魔法の発動に体力を消耗していたのだ。

ラルドは何度も慈しむ様に髪を撫で、満足した頃ようやく後を口
ーズに託して部屋を出た。

扉の外には当たり前のようにダージリンが控えていた。

「これから本番ですね」

「そのようです。五大精霊王にも会っておかなければ。近いうちに

会いに行きましょう」

「では準備を整えておきます。エレナ様の準備はローズがやっておいてくれるでしょうから」

「頼みましたよ、ダージリン。この外出、一筋縄ではいかないでしょうね……」

三人を待ち構えるこれからの出来事に思いを馳せ、ラルドは鋭く瞳を光らせながら深い息を吐くのだった。

続く

Vol.9 真夜中の散歩

ラルドが部屋を出てから数時間が過ぎたのだろうか。

窓の外からは淡い月明かりが差し込み、満天の星空が広がっている。

まだ日も高い頃からベッドに押し込まれてしまったエレナは、不意に覚醒した意識のおかげですっかり目覚めてしまった。

気だるい身体を起こしてベッドを抜け出す。

昼間の出来事はあまりにも突然だった。

ラルドから教えられた事も現実離れしすぎていて、何だか信じがたい事だった。

ついこの間まで人間界で当たり前のように普通の暮らしをしていたのに、今では魔界だ魔法だ魔族だと、この上なくファンタジーな世界にいる。

それさえも夢のような出来事なのに、まさか自分が魔法を使ったなんて。

本当に、私が…？

エレナは自分の小さな手のひらを見つめた。

とても信じられない。

首を横に振って否定すると、星空の輝きに導かれて窓際へ吸い寄せられるように歩み寄った。

眼下に広がる広い庭も今は寝静まっているようだ。

それでも中央にある噴水だけは月明かりを反射して小さく水面を揺らしていた。

何億という星が輝く夜空は眩しいくらいに美しく、月明かりは人間界と同じように温かくて、エレナの足は自然と部屋を飛び出してしまふ。

長い廊下を抜けて使用人用の小さな扉をくぐり、中庭へ向かう。そこに広がっていたのは闇の中で静かにそよぐ草木と、時折微か

な水音を立てる噴水が光を反射する、幻想的な世界だった。

不思議と怖さはない。

むしろ守られているような安心感と、心地よさが漂う。

エレナは丁寧に整えられた垣根に沿って歩き出した。

まるで迷路のような垣根はエレナより頭一つ分ほど背が高く、少しだけ物語の世界に入ってしまったヒロインのような気分になる。

真夜中の散歩は思っていた以上にワクワクする。

いつの間にかどんどん歩いて辿り着いたのは、ぽつかりと開けた広場だった。

白いテーブルセットが置かれている。

そこに、一つの人影を見つけた。

彼女が声をかけるより一瞬早く

「エレナ」

と、呼びかけられる。

「ラルド様？」

驚いたように呟いて、エレナはすぐに彼の隣へ駆け寄った。

そんな仕草に嬉しくなる。

自分の姿を見つけて小走りしながら寄ってきてくれるなんて。

ラルドはだらしなく緩んでしまう頬に手を添える。

本当はこんな夜中に出歩いていることを咎めなくてはいけなのだけれど、エレナの状態を考えれば許さざるを得ない。

何かあれば自分が彼女を守ればいいことだと考えて、ラルドは彼女のために椅子を引いてそこへ座るように促した。

「眠れませんか？」

そう問えばエレナははにかんだように笑う。

「はい。でも昼間はよく眠れました」

「それはよかった。身体の具合はどうです？」

「おかげさまで何ともありません」

答えたエレナの瞳に戸惑いが浮かぶのを見取って、ラルドは

「あまりに突然の事で、まだ実感がわかないのではありませんか？」

穏やかに尋ねた。

エレナの瞳はすぐ大きくなる。

なぜラルドには分かってしまうのだろう。

驚きも戸惑いも、見せまいとしているのに何故かラルドは感じ取ってしまう。

そしてエレナを幼い子供のように上手くあやしてくれる。

不思議な、人。

彼女が知る中で「魔王」と言えば言葉通り最悪最強の存在ばかり。けれど目の前で微笑みかけてくるこの魔王は、ちっとも魔王らしくない。

というより、人間の「魔王」に対する常識が一つも当てはまらない。

他に類を見ないほどの美しさを持ち、誰よりも温かい。

透き通るような瞳を見ていると、心地よく吸い込まれてしまいそうだ。

無意識のうちに速さを増す鼓動にエレナはきゅ、と胸を押さえた。

「エレナ？」

月夜に照らし出された頬が赤く染まっているのを見逃すはずはない。

小さな喜びに彼女の手を包み込む。

「!？」

瞬時エレナはびっくりと身体を震わせて彼を見つめた。

こんな反応をすれば、私を喜ばせるだけなのに。

ラルドは微笑を深くして彼女を引き寄せる。

その力は決して乱暴ではないのに確かな拘束力を持ってエレナを抱きしめる。

不意にそんな事をするから、エレナは眩暈がするほど鼓動を速めることになってしまう。

抵抗する間もないほど一瞬の事なのに。

「少しの間このままでいさせて下さい。私は嬉しくて、心配で、ど

うになつてしまいそうなんだ」

懇願するような言葉に、エレナは彼の腕の中から顔を上げる。

「どうにか、って」

「前に話したことを覚えていますか？私の魂に近い者でなければ魂の姿に触れることは出来ない、と」

「はい」

「実は単に魂に近い者というなら、この世界にもっと存在しているんですよ」

「え…？」

「そうでなければ代々魔王が伴侶を見つけられなくなつてしまひますからね。ただ、魔王には伴侶以上に大切な存在がいるんです」

「？」

「月乙女、です」

「つきおとめ…？」

素直な疑問符を浮かべたエレナは首を傾げた。

「魔界に伝わる伝説です。月乙女は魔王の力を確固たるものとし、この世界の繁栄を約束する存在。月乙女を得た魔王は完全なる魔王として覚醒する。そしてこの世界に生じたひずみを修復する事ができるんです」

「つまり魔王が完全な力を手に入れるためには、月乙女を伴侶にする必要がある、ということですか？」

「その通りです。あなたはとても聡明な人だ。よく私の話を覚えていてくれましたね。理解が早くて助かります」

ラルドは言うが早いかまるでご褒美とでもいうかのように、エレナの額に口付けを一つ落とす。

普段そんな事をすれば間違いなく真っ赤な顔で抵抗するだろうが、今の彼女にそんな素振りはない。

ほんの少しだけ照れくさいけれど、何故だろう、そうされる事がとても自然な事に思っていたのだ。

この穏やかな空気と、安心感のせいかもしれない。

エレナは静かに彼の腕の中で微かに聞こえるラルドの心音に耳を傾けていた。

「これまで私の知る限り、代々の魔王は確かに素晴らしい伴侶を得ていた。けれど万全ではなかったのです」

「…月乙女には出会えなかった…？」

「はい。というより、月乙女は現れなかったと言う方が正しいでしょうね。どんなに魂が近くても、それが月乙女の証明と言うわけはありません。それでも魂さえ近ければ魔王として君臨するのに十分な魔力を持つ事はできましたから、さほど問題にはならなかった。けれど歴史上、大きな戦乱が2度ほど起こっています。血も涙もない混沌の時代があった」

「魔王の力が完全ではなかったから？」

「恐らく。どこかに生じたひびきが大きくなり、負のエネルギーが大量に集まってしまったのでしょう。魔界は元々そうしたエネルギーの掃き溜めとして造られたそうです。魔王の力がたりなければこの世界の力のバランスが狂ってしまう」

「私が知っている天界と魔界の話もあながち間違っではないいんですね…」

「そういうことになりますね。けれど今私たちが見ているこの美しい世界も偽物ではありません。それこそ何度も壊された世界かもしれませんが、その度に魔王は長い年月をかけてこの世界を守ろうとしてきた」

自分もまたこの世界を守りたい。

ラルドの瞳は遠い過去に思いを馳せているように星空を映している。

エレナはゆっくりと彼の視線を辿った。

そして唐突にあることに気付く。

考えた瞬間、背筋が寒くなるほど不安を掻き立てられるような、そんな可能性に。

「ラルド様…もしも月乙女が現れなければ、またこの世界は…」

口にした途端体中を這い回るような不安が襲う。
けれど。

予想に反してラルドの表情は穏やかだった。

慰めるためでもなく、信じ込ませようとしているわけでもなく、
自然な柔らかさで微笑んでいて。

「心配要りません。言っただでしょうか？あなたしかいないと思ったんです。私の勘はよく当たるんです」

「でも月乙女は伝説って」

「けれど実話でないという証拠はない。それに戦乱が起こってもこの世界はこうして残っている。と言う事は、実際魔界を救った人物がいると言う事です。それを見た人物が今は存在していない、というだけのこと」

それなら、つまり、どういうことなのだろう。

ある一つの可能性も、初めから自分には当てはまらないと思っ
ているエレナはひたすら考え込むだけ。

ラルドはそつと耳元でささやく。

「あなたが伝説を現実にしてくれたんですよ」

エレナがその言葉の意味を理解したのは、額にもう一度彼の口付
けが降ってきた頃だった。

続
く

Vol.10 月色のトカゲ

”月乙女” っていうても、現実はやっぱり厳しいと思う。

「……」

やっぱりもう、なんでこうなるの？

私、あなたに何かした？

魔法で意地悪するくらいならまだマシ。

だけど、何も窓から外へ投げ捨てなくてもいいと思うの。

目の前が何回も回転して目は回るし、それに何より今度こそ本当に死んじゃうって怖かったんだから！

体が軽いおかげでこうして庭園の木の上に無事着地できたけど、地面にぶつかってたら絶対死んでたと思う。

助かったのはホッとしたけど、今私、とってもとっても困ってるのよ。

懸命に顔を動かして見上げれば、さっき通り抜けた窓ははるか頭上の彼方。

この体じゃ窓がどこにあるか見えないし、声を上げることもできないなんて。

せめてブタくらいにしてくれれば、鳴き声を上げることもできたのに。

トカゲじゃ鳴きたくても鳴けないもの。

ここからあの部屋まで、何としてでも戻らなくっちゃ。

執務室では今日もラルド様が眉間にしわを寄せながら、書類の山と格闘している。

きつと疲れていらっしやるもの、美味しいケーキとお茶を用意しなくちゃ。

頑張るのよエレナ！

大丈夫、ここはお城の敷地内だもの！

エレナは散々心の中で自分を励まし、キツと決意を固めた瞳で城壁を見上げていた。

今の自分は白い体に淡い光をまとった不思議な色のトカゲ。

部屋の中で彼女を見るなり呪文を唱え出した魔族の令嬢を少しだけ恨めしく思いながら、変わり果てた姿で必死に歩を進める。

庭園の庭木は丁寧に入入れされており、エレナの体をしっかり支えてくれる。

どうしてこんなことになったのかと言えば、もちろん最近よくある令嬢たちの嫌がらせが原因だ。

しかも今回はブタやカエルではなく、声も力も持たないトカゲ。

これでは助けを呼ぶこともできない。

さらに昨日の出来事が既に知れ渡っていたようで、エレナが何かを思う間もなく、相手の魔法は発動していた。

こここのところ頻繁に悪意のある悪戯に困らせられているが、今日は本当に困った。

悲鳴を上げる暇もなかったし、ラルドたちのいない場所で魔法をかけられたせいで、彼らに気づかれてもいない。

昨日のように洪水が起こったり、悲鳴を聞いたりすればラルドが一目散に飛んで来てくれるだろう。

けれど今日はそうもいかない。

それなら自分が歩いて彼の元にたどり着くまでだ、とエレナは覚悟を決めて黙々と（自然とそうなるのだが）果てしなく続く庭木の上をバランスを保ちながら歩き続ける。

当然、城内の大騒ぎなど、知る由もなく。

一方、彼女の異変に最初に気づいたのはローズだった。

「エレナ様、美味しいお茶が入りましたよ」

朗らかに告げながら書庫の扉を開け、ワゴンを押して室内に視線を向けた時だった。

「…エレナ様…？」

いつもなら山の稜線がはつきり見える南側の窓際に座っているはずなのに。

部屋の差し込む光をせに受けて、温かな空気の中、ゆったり読書する時間をこよなく愛しているエレナが、それを中断していなくなるのはおかしい。

よほど急な用事が出来たのだろうか。

しかしどこへ行くにも必ずローズに告げてから移動するエレナが、何も言わず居なくなるなんて考えられない。

何か異変が起きたに違いないと直感的に感じて、ローズは書庫内をくまなく見渡す。

当然主の気配はあるはずもなく、すぐさま書庫を飛び出して、入室を許されている部屋全てを回る。

少々扉の開け方が乱暴になるのも仕方ない。

次から次へと部屋を覗いてはエレナを探し、居ないとわかれば廊下を必死の形相で駆け抜けて次の部屋を開ける。

地下の食料倉庫から最上階の客室までおよそ521の部屋、全てを探し終えても見つからないエレナの姿に、ローズは観念して最後の部屋の扉をノックした。

大人しく叩けるはずもなく、室内にいた彼らを驚かせてしまうくらい勢いで。

「陛下！ダージリン様！」

普段は穏やかで冷静なローズが、それら全てを吹き飛ばす程の慌ただしい口調で呼びかける。

「何事ですか！？」

重い扉をダージリンはいとも簡単に開け、それを合図にローズが飛び込んでくる。

「エレナ様がいらっしやらないのです！このお城のどこにも、どこにも…！！」

「…何…？」

顔面蒼白で訴える彼女を目に留めると、ラルドは立ち上がり瞳を閉じる。

瞬時、自分の魔力を放出しその範囲を広げる。

エレナの気配を探っているのだ。

ほんの数秒ほどでラルドは目を開ける。

彼はぽんぽんとローズの肩を叩いて微笑んだ。

「安心なさい。エレナなら庭園の方にいますよ。ここからも見えるは……」

ぴたりと動きがとまる。

感じ取った気配は間違いなく庭園の方だ。

そして執務室の窓からは手入れの行き届いたそれが見えている。しかし。

「どうなさいましたか？陛下」

「……おかしい」

「は？」

「いない」

「え？」

「確かに気配は感じるのに、エレナの姿がありません」

「な……!？」

ガバツとダージリンも窓際に駆け寄り、眼下に広がる庭園に目を凝らす。

まさかラルドがエレナの気配を間違えるとは思えない。

それなら必ずどこかに姿が見えるはず。

庭木の高さは全て均等に揃えられ、小柄なエレナでも頭くらいは垣根から見える。

こうして頭上から見下ろしているならなおさら、どんな格好をしていても探し出すことができる。

けれど、一向にそれらしき姿は見当たらない。

「一体これは……」

隣でダージリンがつぶやく。

が。

「あれは…」

もう一度エレナの気配を慎重に辿っていたラルドはふと、視界の端で微かに動くものに気付く。

「糸…いや、トカゲ？ それにしては不思議な色をしていますね。白でもなく金でもなく、まるで月のような…」

「それだ！」

「えっ？」

「エレナですよ！あのトカゲはエレナです！」

「ええっ！？」

「まずい、早く助けなければ！あのままでは魔獣に一呑みにされてしまう！」

そういうが早いかラルドの姿がぷつりと消え去る。

ダージリンはガラス窓を開けて身を乗り出すと、庭園の様子を覗き込む。

つられるようにローズも身を乗り出して、ハラハラと見守っていた。

魔界の空には、自由に飛び回り旋回する大きな鳥型の魔獣。

彼らの好物は地上に生きる動物たち。

自分より小さなものならなんでも飲み込む習性を持っている。

常に狩りをしているため視力も抜群だ。

他のトカゲと違い、目立つ色をしている今のエレナは格好の獲物。ラルドが慌てるのも頷ける。

瞬きをする間に彼はそつと、懸命に木々の上を歩き渡るエレナの側に転移していた。

彼女の視線の高さに自分も合わせて顔を寄せる。

一心不乱に前だけを見て進むエレナは気付かないが、ふっと目の前に手が差し出されると、ビクッと体を震わせて固まった。

（な、何！？）

そして気付く、隣が存在。

深い緑色の瞳が、まるで宝石のように輝いている。

そこに映るのはトカゲになった自分の姿。

（ラルド様…？）

「呼んでくれればすぐ助けに来たのに」

（呼ぶ？）

「声を出さずとも、心で呼んでくれれば通じるんですよ。あなたの声ならどんな形でも私には届くんです」

子供をあやすように優しく言われて、エレナの体はふわりと彼の手のひらに乗せられる。

バランスを崩しそうになって咄嗟に伏せると、そつと背を撫でられた。

「トカゲになってもあなたは美しいですね。それに一生懸命歩く姿はとても可愛らしい。私の手に乗れるのも素晴らしいと思いませんか？」

（素晴らしい？こんな、トカゲの私でも？）

思わず頬が緩んで朱に染まる。

小さなトカゲのエレナから見ると、今のラルドは巨人サイズだが、もって生まれた美しさは変わらない。

これだけ近くで見つめても、きめ細かくなめらかな肌も温かく細められた瞳も、そよ風になびく金の髪も、何もかもが完璧なのだ。

眩しすぎて何だか照れてしまう。

エレナは顔を隠すように、彼の手の上で伏せた。

そんな反応はラルドを喜ばせるだけ。

「さて、中へ戻りましょうか。お茶の時間にしましょう」

心地よい声が聞こえたあと、ちゅ、と後頭部に柔らかな感触が訪れて、エレナはこてんと首を傾げた。

直後。

今度は爬虫類のウロコに覆われた唇にも柔らかなものが押し当てられて、先ほどの感触の正体に気付かされる。

魔王の手の上に伏せった月色のトカゲは、ほんのり全身を朱に染

めて丸くなった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719z/>

こうして魔王の婚約者！？

2011年12月17日21時52分発行